あけの佐保姫

高明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あけの佐保姫

【Ｎコード】
Ｎ０１８３Ａ

【作者名】
高明

【あらすじ】
ある日ふと見かけた仲のいい親子。哀は懐かしさに目を細め、記憶は過去へと遡る。

（前書き）

今回はかなりオリジナルのキャラが出張ってます。
それでもＯＫ！という方のみお進みください。

ふいに聞こえた名前に足を止めると、哀はゆっくりと振り向いた。
5歳くらいの麦藁帽子をかぶったおさげの女の子が、母親らしき人物に笑顔で駆け寄る。母親も笑顔で迎え入れ、どちらからともなく手をつないだ。
平和そのものの風景。
哀は初夏の日差しに目を細めながら、懐かしそうに親子を見送った。

「いいかげん、薬なんか作ってないで恋人の一人でも作りなさいよ！」
お姉ちゃんは大丈夫だから。
そう言うと伝票を手にレジへ向かった姉に小さくため息をこぼすと、志保も席を立った。支払いが終わったのを見計らって先に入り口に向かう。
カラン、と涼やかな音をたててドアが開くと、志保たちを送り出す店員の気持ちの良い声が外の雑踏に吸い込まれていった。そのまま歩き出そうと足を踏み出すが、それを明美が止めた。
「志保、ちょっと待って。私、これから少し寄るところがあるの。だからここでお別れ。
ごめんね」
「え……」
少し戸惑ったように振り向いた志保の前で、手を合わせた明美が申し訳なさそうな笑みを浮かべていた。めったに会えない姉との時

間は志保にとってとても大切なもので、目的地は違ってもいつも途中まで話をしながら帰るのに、なぜ今日に限って、と、彼女にしてはめずらしく拗ねた心持で姉を見やる。
もっとも、彼女は感情が表に出るほうではないので傍目には無表情に見えるのだが、そこは肉親、明美にとっても志保は大切な妹で、今どういう心境か、微妙な変化で感じ取っていた。そのためにますます身を縮めると、もう一度ごめんね、と謝罪の言葉を口にする。
「別にいいけど……。やっぱり仕事が上手くいってないんじゃない？」
組織内で漏れ聞いた噂話を思い出して眉をひそめると、明美は違うと否定した。
「仕事じゃないのよ、まあ言うなれば私用かしら。ただちょっと遠いところだし、早めに済ませたい用事だから行けるときに行っておきたいの。だからほんっと、ごめんね」
「ううん……。でも気をつけてよ、彼らは容赦ないから」
「まかせなさい、こう見えてお姉ちゃんは世渡り上手なんだから！」
明美の力強い笑顔を志保は信じたかったが、彼らの恐ろしさは自分のほうがわかっている。そんな志保の不安を感じ取ったのか、明美は笑顔を見せると軽く腕を曲げてぐっと拳を握った。
「大丈夫、少しは姉さんを信じなさい！志保は何の心配もいらないから、早くいい男捕まえなさいな」
「……お姉ちゃんもね」
少し笑った志保に笑い返すと、じゃあまたねと明美は踵を返した。
「……お姉ちゃん！」
その遠ざかる姉の姿に急に不安を覚え、志保は思わず呼び止めた。くるりと振り返った明美がどうしたの、と言うように首を傾げるのへ、なぜかこのまま別れたくないという強い思いが湧き上がってきたが、志保は思い過ごしだと自分に言い聞かせると、一言だけ伝える。
「……無理しないでよ」

「あなたもね！」
ばちっとウインクする明美の姿を今度こそ見送って、志保は不安な気持ちを拭いきれぬまま一歩踏み出した。

大雪が降ると麻痺してしまう都会の交通網も、今年は暖冬の所為か、滅多に乱れることはない。いつもと同じ電車に乗るために駅へ向かった志保は、ふと歩いてみようかと気まぐれを起こした。
平日の昼間とはいえ、他よりいくらかマシと言うだけの混雑する地下鉄に一人で乗るのは気が重い。まして志保の生活圏は静かな、薄暗い研究室であり、時折研究所内の庭に出ることはあっても、こうして街中に出てくることはあまりない。
冬場の薄曇の天気ならちょうどいい、と志保は駅へ向かう道をはずれ、大通りへ出た。
しばらくは物珍しそうに――といっても表情には出ていないが――歩いていたが、気が晴れるどころかだんだんと陰鬱になり、志保はとうとう足を止めた。
目に入るのは無機質な灰色の建物に渋滞する車から出る排気の煙、道行く人々は皆よく似た色の服をはおり、なぜか俯きがちで、まるで周りのことに一切無関心だというように足早に通り過ぎていく。
耳に聞こえるのはけたたましいクラクションの音、踏み切りの甲高い声、改造車の空気を切り裂く轟音。不思議なことに、これだけの人がいながら話し声は聞こえてこない。
志保はしばらくそこに佇み人の群れを眺めていたが、やがてため息をつくと駅へ引き返そうと足を返した。
「――――え……」
不意に何かに引っ張られるような感触を覚えて顔を下に向けると、志保の黒のジャケットの裾を掴み、見上げてくる丸い瞳とぶつかった。肩先で切りそろえられた栗色の髪は風に乱され、寒さで頬と鼻

を赤く染めて、ぎゅっと口を引き結んで見上げるその少女はまだ小学生にはなっていないだろう。
突然のことに対応できず動きを止めた志保は、見詰め合ったままの少女の眉が少しずつ真ん中に寄せられ、真一文字に結ばれた口はさらに力が入れられ、飴玉のような瞳が潤んできたのを見て、はっと我に返った。
「ねぇ、ちょっと」
泣く、とは思ったものの、志保にはどうしていいかわからない。研究所にいるのは皆志保より年上ばかりで子供の相手などしたことはないのだ。その上人と触れ合う環境で育っていないために、余計に接し方がわからない。
（もうっ、こんなときに限ってお姉ちゃんがいないんだから！）
友人も多く、優しい姉ならうまく対処できるのに。
そう心の中で愚痴をこぼしたとき、ふと姉の笑う姿が浮かんだ。皆に慕われるのはいつも笑顔でいるからか。
志保はごくりと唾を飲み込むと、ゆっくりと口の端を上げた。ぎこちないものの一応笑えたことに満足して少女を見つめ返す。
途端になんとか我慢していたであろう少女の顔が一気に弾け、声を上げて泣き出した。
「な……っ」
志保は泣き出された焦りよりも自分の笑顔で泣いたということに少なからずショックを受け、その場に立ち竦んでしまった。普段から笑わないという自覚はあるし、今の笑顔もぎこちなかったと思う。しかし、自分の笑う顔は泣くほど恐ろしいのかと志保は傷ついた。
今日は最悪の日だと心中でため息をこぼし、あまり注目を浴びるのはまずいと理性が働き出したのをきっかけに、とりあえずどうすれば少女が泣き止むのか真剣に考え出した志保の耳に、泣き声以外の言葉が聞こえてきた。
「……ウィ、ヒック、お、おか、さ、ヒィック、おかあ、さん」
（お母さん……？迷子かしら……）

聞き取れたものの何の解決にもならないと眉をひそめていると、まだ何か言っているのに気付き、少し上体を傾けて少女の口元に耳を近づける。
「ウック、かあ、じゃ、ヒッ、ない」
（お母さん、じゃ、ない）
つまりは笑顔を見て泣いたわけじゃない、と。
「……ああ、そう、そうなの。あなた間違えてついてきたのね」
手掛かりがつかめたことに対してではない安堵の息をついて、志保は少し表情を緩めた。
「でもいつから」
周りを見回してみるが、少女の泣き声が聞こえたはずなのに母親らしき人影はいない。それどころか志保達に迷惑そうな視線を向けるだけで誰も声をかけてはこない。
（……やっかいごとには関わりたくないってトコかしらね）
きっと自分も無関心で通り過ぎるだろうと思ったが、すでに関わってしまっている今、なんとかしなければならない。
（そうは言っても警察に行くわけにはいかないし……）
困った、と少しずつ泣き止んできた少女を見下ろした志保は、彼女が制服を着ていることにようやく気付いた。
「この近くに幼稚園なんてあるのかしら」
ざっと見回すがそれらしき建物は見えない。このあたりの地理には疎いが、これだけ交通量の多い道に面した場所にはないだろうと踏むと、志保はなるべく表情を出さずに少女に話しかけた。
「あなた名前は？」
「……ック、あーちゃん、っふ」
泣いたためにまるでウサギのようになった赤い目を志保に向けて、少女はまだ残る嗚咽の合間に答えた。
「苗字は？上の名前はわかる？」
重ねて聞くと、少女はしばらく考え込むように眉を寄せていたが、ふるふると首を振った。さして期待していなかったため、そう、と

答えた志保は、少しばかり考え込んで決断した。
「……ここでじっとしてても仕方ないわ、とりあえず違う道に入りましょう。あなたどこから来たかわかる？……いえ、いいわ。それじゃ行きましょ」
こっちを見たまま何も言わないので、とりあえず歩こうと少女を促すと、なぜか彼女はついてこない。服を掴んだままなので志保も動けず、困ったように少女を見下ろすと、ぱっと目を逸らし、口を尖らせて掴んでいないほうの手を閉じたり開いたり、物言いたげに立っている。
「……何？」
さっぱりわからず尋ねると、少女は俯いたままぐいっと手を志保に向ける。それでもわからず眉をひそめると、少女がちらりと上目遣いで見た。その期待と不安の混じった目を見て、志保はようやく彼女が何をしたいのかを悟った。
慣れないことにぎこちなく手を差し出すと、少女の手を握って歩き出す。少女は服を掴んでいた手を離すと、今度はちゃんとついてきた。

（……落ち着かないわね）
さっきまで全く気にならなかった人々の視線が、今は自分に集中しているような錯覚を覚え、我知らず志保は握る手に力をこめた。路地裏に入り、人通りが絶えてようやく息をつく。
彼らがこのことを知ったらどう思うだろう。……いや、子供と手をつないで歩いてるなんて誰も信じないに違いない。そもそもどうだっていいのだ、他人が何をしようと自分に関わりのないことに関心は持たない。あれはそういう場所だ。
志保は皮肉な笑みを浮かべると、隣を歩く少女に目をやった。

何を話すでもなく、俯いたまま黙ってついてくる彼女は、志保がどこに行こうとしているのかわかっているのだろうか。ちゃんと家に連れて行くと思っているのか、何も考えていないだけなのか……。

視線を前に戻した志保は、目当ての建物を見つけ足を止めた。少女もつられるようにして止まると、顔を上げた。

「……ここ？」

もし違うのならまた探さなくてはならない。

少女はしばらく前を見ていたが、やがて志保を見上げ、口を開いた。

「あーちゃん！！」

少女の口から声が漏れる前に前方から声が聞こえ、思わずそちらに顔を向けると、驚いた顔の女性が一人、一瞬志保の顔を信じられないように見て隣の少女に目を移し、慌てて門のところから走りよってきた。二十歳ぐらいの、まだあどけなさの残る顔にほっとした表情を浮かべ、少女より少し長めの髪をたなびかせながら二人の元へ駆け寄ると、そのまま少女を抱きしめた。

「……もうっ、どこ行ってたの、急にいなくなるからびっくりしたでしょ！みんな心配してたんだよ」

涙まじりの声に、少女は志保の手を離すとぎゅうっとその女性の胸に顔を埋めた。

「……ごめ…なさい」

「うん。あーちゃんが無事で良かった……」

なぐさめるように少女の背中を叩き、心から安心したような笑顔を浮かべた女性は、隣に立っている志保が自分たちを呆気にとられたように見ているのに気付き、慌てて立ち上がった。

「ご、ごめんなさい、えと、あーちゃんを送ってきてくださったんですよね。あの、ありがとうございます！立ち話もなんですから、どうぞ中へ」

「いえ、私は……」

長居は無用と断りかけた志保はじっと自分を見つめる少女の視線

に気付き、少し迷ってから頷いた。女性は良かったというように笑うと、「こちらです」と少女と手をつないだまま先に立って敷地内に入っていく。志保はちらりと後ろを振り返ってから、意を決したように二人の後を歩き出した。

「今ちょうどお昼寝の時間なんです」
思いの外静かなことに疑問を感じ尋ねると、どうぞ、と暖かいお茶を出しながら先ほどの女性が答えた。
「ありがとう、頂くわ」
そう断って湯呑を口元に運びかけた志保は、なにやら視線を感じて動きを止めると彼女に視線を合わせる。
「……なにか？」
「ああ、ごめんなさい！ちょっと似てらっしゃると思って……」
誰に、とは聞かず、志保は一口飲むとテーブルに戻した。
「あの子は？」
「あ、あーちゃんですか？今園長先生とお話してます。あとで園長先生が来られますからそれまでは帰らないで下さいね」
でないと私が怒られちゃいます、と、まるで志保が一刻も早くここを立ち去りたがっていると思っているかのように制すると、彼女は無邪気に笑った。
実際志保は早く帰りたかったのだが、なんとなく彼女は手段を選ばずに止めてきそうな気がして、ただ黙って座っていた。しかしなかなか園長先生が現れず、このまま沈黙を保っても良かったのだが目の前の彼女がそわそわと落ちつかぬ様子なので、志保にしては珍しく自分から他人に話しかけた。
「あの子、年はいくつ？」
「5歳です！」
沈黙が苦痛だったようで、彼女はぱっと顔を輝かせると意気込ん

で答えてきた。その勢いに少々押されつつ、志保はどうせならと疑問に思っていたことを聞いた。
「5歳にしては言葉が少ないわね。私が知らない人間だ、っていうのもあるかもしれないけど」
短い時間だったが、少女が話したのは「あーちゃん」と「おかあさん」、「ごめんなさい」だけなのだ。年相応の頭の回転ができることは、こちらの質問にちゃんと答えることからわかる。とすれば、何か他の原因があるのかと、志保はほんの少し興味を持った。
案の定、彼女は顔を曇らせると、少し迷う素振りを見せた。
「あの子、ほんとうは明るいおしゃべりが大好きな子なんです。だけど……」
「両親に問題でも？」
志保があとを続けると、彼女はびっくりしたように目を丸くした。そして慎重に言葉を選びながら真剣な顔を向ける。
「どうしてそう思うんですか？あの子、何か言いました？」
「いいえ……。ただ苗字を聞いたとき答えたくないようだったし、人懐っこそうな子だから彼女の問題じゃなくて家庭の、もっと言うならば母親に何かあると思ったのだけれど……どうやら図星みたいね」
落ち着いた志保の言葉にふー、と力を抜くと、彼女はぽつりぽつりと話し始めた。
「……あんまりこういうこと、他人に話しちゃいけないんですけど……。あの子の両親、去年の終わりぐらいかな、離婚されて……。あの子だいぶショックだったみたいで、しばらく誰とも口を聞かず、いっつも一人で過ごしてました。今年に入ってからは私たち先生とはおしゃべりもしてくれるようになったんですけど、子供達とはほとんど口も聞かないし、一緒に遊ぼうとしないんです」
彼女はほとほと困り果てたように深いため息をつくと、また話し出した。

「……今は母親と一緒に実家のほうで暮らしてるんですが、仕事が、その……忙しくてめったに家に帰ってないそうなんです。あの子の送り迎えも母親の両親、つまりおじいちゃんとおばあちゃんなんですけど、この二人がされてて……。最近は笑顔もたまに見せるようになった、って喜んでおられましたけど、園内では笑ってくれません」

だからちょっと悲しいんです、と、寂しそうな笑みを浮かべるのへ、志保は微かに頷き返した。

「それに最近では今日みたいにふらっと外に出るようになって……。これで3回目です。前の2回は門のすぐ外で連れ戻せたんですが、今日はほんのちょっと目を離した隙にいなくなってしまって……。ほんと、生きた心地がしませんでした。だからあなたと一緒に立っているのを見たときすごく驚いちゃって、思わずへたり込みそうになりました」

少し照れたように笑うと、彼女は口を閉じた。

「……それは私を母親と見間違えたから？」

それまで黙って聞いていた志保が静かに問いかけると、彼女はその感情の表れやすい顔に驚きの表情を浮かべて志保を見返した。あまりに素直な反応に、志保は気付かれない程度の微苦笑を浮かべると説明を加える。

「……別にたいしたことじゃないわ。あの子が私についてきたのは後姿が似てたからだろうし、あなたも私の顔を意外そうに見てたもの」

それを聞くと彼女は感心したように頷き、

「はぁ……、まるで探偵みたいですねぇ」

と呟いた。志保は思わず表情を崩しかけたが、なんとか踏みとどまると、咳払いで誤魔化した。どうやら彼女は不自然だとは思わなかったらしく、すごいなぁ、と憧れの眼差しで志保を見ていた。

しかし志保にはその視線がとても居心地の悪いものに感じられて、少し身動ぎをすると逸れた話を無理やり修正した。

「母親に会いたくて外にでるのかしら。この近くで働いているの？」
「いえ、ちょっと遠いんですけど……。あの子もわかってるんです、会えないこと。でも会いたい気持ちのほうが勝ってああいう行動しちゃうんだと思います」
途端に顔を曇らせると、彼女は続けた。
「それに心配なのはそれだけじゃないんです。さっきここでは笑わない、って言いましたよね？もう一つ、泣かないんです、あの子……」
「え……？」
志保は驚いて声を上げた。最初に会ったとき自分を困らせたのは、まさに泣くという行為だったはず。
しかし志保の驚きを別のものととって、彼女はほんとなんです、と真剣な顔をした。
「両親が離婚したときも泣かなかったんです。それからずっと、あの子が泣いているところを見たことがありません。家でもここでも、です。……あ、すみません」
彼女はつい熱くなったことを謝ると、でも、と続けた。
「でも本当なんです。泣きそうになってもぐっと我慢しちゃうんです。それがすごく心配で……。一度思いっきり泣いてしまわないと、あの子、これからも笑えないんじゃないかって。……泣いて欲しい、なんて、私変ですか？」
「……いいえ」
気休めではなく、志保は心から否定した。あの子は感情を押し込めてしまっている、そのことに少なからず共感を覚えた。
今の自分と変わりないではないか。周りに本心を見せずに生きていく少女。ただ違うのは、彼女は悲しみから、自分は諦めからきていることか。諦めと恐怖と不安と……。
それにまだ似ているところがある。
「そんな子を放っておくなんてろくでもない母親みたいね」
誰に向けた言葉なのか、志保はふっと口角を皮肉げに吊り上げた。

子供は親を選べない。親の人生は子供にも影響を与えるのだ。そのことを彼女は知っているのだろうか。ヘル・エンジェルと呼ばれていた彼女は……。

「……それは違います」

静かに、しかしはっきりと否定の言葉が聞こえて、志保は視線を上げた。

「どう違うの？私さっき言ったわよね、あの子がついてきたのは後姿が似ていたからだと。この髪の長さの人なんてたくさんいるわ、なのに私についてきたのは色もよく似ていたからよ、この日本人離れした赤みがかった茶髪にね。それにあなたが私を見たときの驚きよう、あれは母親がこの時間ここにいることに驚いたんじゃない、自分の娘と手をつないでいることが信じられなくて驚いたのよ」

彼女の驚いたような顔を見ながら、志保自身、驚きを隠せないでいた。

なぜ自分は会ったこともない母親を非難しているのだろう、なぜ自分は少女に同情を寄せているのだろう、なぜ自分は……こんなにも感情的になっているのだろう。もう会うこともないだろう、ほんの少し交じり合っただけの他人のことで。

「……ごめんなさい、あまり他人が口出しすることじゃないわね」

「……いえ……」

ぎゅっと握り締められた彼女の両手を見ながら志保は息を吐いた。

……どうかしてるわね。

志保は彼女から目をそらしたままちらと戸口に視線を走らせた。なぜか沈黙が苦しく感じられ、今は誰が来ても歓迎できる気がした。その思いに応えるように、開け放してある戸の下のほうにひょっこりと幼い顔が覗いた。

その子は志保と目が合うとまるで挑むような視線を投げかけ、ふいに逸らすと部屋の中を見回し、志保の前に座る彼女に目をとめた。

「せんせい、アイツは？」

「……！た、たっくん、おどかさないでよ……。まだお昼寝の時間

でしょ？」
　条件反射かそれまでの難しい顔をさっと『先生』の笑顔に変えると、彼女は立ち上がって『たっくん』のそばに歩いていった。
「オレのしつもんにこたえてない。アイツは？かえってきたんだろ？」
「たっくん、まずお客さまにご挨拶は？」
「せんせいがおしえてくれたらあいさつする」
「だーめ。人と会ったらまず挨拶するの。さ、近くに行って、ちゃんとこんにちはしよう！」
「……めんどくさいなぁ」
「こらっ」
　その生意気そうな男の子は渋々といった様子で志保の近くまで来ると、睨むように志保を見上げた。
「オカモト　タクヤです、こんにちはっ」
　そう怒鳴るように言うと、志保に返答する暇を与えずくるりと後ろを向き、困ったような顔をしている彼女をこれでどうだといわんばかりに見上げた。
「ほら、いったよ。つぎはせんせいのばんだ」
「今のが挨拶？」
「ちゃんとなまえいったろ？こんにちはもいったし、としはいうひつようない」
「ん～、そうなんだけど……」
　難しい年頃の生意気な男の子とその子に振り回されるまだ若い先生。そんなどこにでもあるような構図が志保には新鮮で、微笑ましいものに思え、微笑を浮かべて二人のやり取りを見守っていた。
「なんでわらってんだよ」
　幼心にも馬鹿にされたと思ったのか、微かにもれた志保の笑い声を耳にしたタクヤがむっとした顔で振り向いた。その顔も生意気でかわいらしくて、志保はくすりと笑った。
「気に障ったのなら謝るわ。そうね、あなたはちゃんと挨拶してく

れたわ。でも……」
志保は言葉を止めるとタクヤの後ろで額に手をやる彼女をいたずらっぽく眺めた。
「……あなたの先生にはまだ挨拶してもらってないわね」
「……へ？」
途端、呆けたように志保を見ると、彼女は傍目にも分かるくらいうろたえだした。
「えっ、やだウソ！私名前言ってませんでした！？わわわ、なんて失礼を……！ごめんなさい、私、カリヤ　ナオコっていいます！」
「せんせいだめじゃん」
冷や汗をかきながら自己紹介したナオコにタクヤが半眼を向ける。
「だ、だって……」
「いいわけはなしだよ」
「いいわけって、そんなつもりじゃ……」
「もうきかない。それよりアイツは？」
幼稚園児に押されてたじたじになりながら言葉を探すナオコに園児らしからぬ口を聞くと、タクヤは真剣な顔で尋ねた。その表情を見たナオコはふー、と息を吐くとその場にしゃがみ、タクヤと目線を合わせるとにっこり笑った。
「今園長先生とお話してる。あーちゃんのお話が終わったら、先生、ちゃんと呼んであげるから、たっくんはみんなとお昼寝しよう」
少女が帰ってきたことを聞いてタクヤはほっと顔を緩ませたが、寝に行くように言われて口を尖らせた。
「オレ、いまねむたくねーもん。いいよ、アイツがくるまでここでまってる」
「たっくん～、先生今とっても大事なお話してるところなの。だから向こうで待ってようね」
「だいじなはなし？」
タクヤはちらりと志保を見るとすぐにナオコに顔を戻す。そして「ぜったいだよ！」と念押しして走って部屋を出て行った。ぱたぱ

たと軽い足音がしなくなってから立ち上がると、ナオコが申し訳なさそうに志保に向き直った。
「ごめんなさい、いつもはちゃんと挨拶できるんですけど……まあ生意気なのは今に始まったことじゃないんですけどね」
苦笑するナオコに志保は首を振った。
「別に気にしてないわ。多分、好きな子をいじめる母親の仲間、とでも思ったんじゃないかしら」
別段嫌味を言ったつもりはなかったのだが、それを聞くとナオコは笑みを消し、ゆっくり歩いてくるとさっきまでいた場所にすとんと腰を下ろした。そうしてしばらく逡巡したあと思い切ったように口を開く。
「あの、そのことなんですが……、みんなあーちゃんのお母さんのこと、親の風上にも置けないとか子供がかわいそうだって悪く言いますけど、違うんです。ただ、一生懸命なんです。まだ子供が小さいのに離婚して、今は実家にいるからいいけど負担を考えると早く自立しなくちゃいけない、そのためには仕事をいっぱいしてお金を稼がなくちゃいけない。だから今がんばらなくちゃって……。別に善人ぶって彼女をかばっているわけじゃありません。でも私もそうだったから。片意地張って余裕をなくして、目的以外、何も見えなくなるんです。ちょっと足を止めれば暖かく見守ってくれている人がいることに気付くはずなのに」
ナオコは顔を上げると正面から志保の目を見る。
「さっきおっしゃってましたよね、私が驚いたのは手をつないでいるからだって……。それ、半分当たりです。だけど本当に驚いたのは、雰囲気がすごく優しかったからです。今までにも手をつないでいる姿を見たことはあります、でもあんな柔らかい雰囲気は見たことがなかった。だからびっくりしたんです。子供って敏感でしょ？だからあなたについてきたのかもしれない」
志保は軽い衝撃を受け、目を見開いてナオコを見た。
優しい？柔らかい？まさか。

私にそんな言葉が当てはまるはずはない。
「実を言うと私、あーちゃんのお母さんと中学で一緒だったんです。特に仲のいい友達ってわけじゃなかったんですけどね。彼女すごい努力家で、正義感の強い、そんな子でした。間違っていると思ったら相手が先生だろうととことん議論して、自分が間違っているとわかったらすぐに謝れる、素直な子です……って、私すごいえらそうに話してますけど、そういう人なんです。私は彼女が好きでした。同じクラスになってしゃべってみるとその知識によく驚かされました。だけど彼女、友達付き合いが上手くないんですね。決して特別を作らない。今だから思うんですけど、多分怖かったんじゃないかって思うんです。自分の心の内をさらけ出すことに不安を感じてたんじゃないかって。そこまで心を許せる相手がいなかった。だから彼女はいつも一生懸命だったんです。周りに寂しさを悟られないために。……すみません、こんな話して。退屈ですよね」
ナオコは一度言葉を切ると、沈黙を保ったままの志保に心配そうな顔を向けた。志保が首を振ると、ナオコはほっとしたように顔を緩めた。
「私一度しゃべり出したら止まらないタチで……。よくいわれるんですよ、ブレーキのついてない車だなって。でも子供達には評判いいんですよ？これ、ちょっと自慢なんですけどね」
確かに楽しい先生かもしれない。
先ほどのタクヤとのやり取りを思い出して、志保は微笑する。それに笑い返して、ナオコは少し真剣な顔をすると続けた。
「あーちゃんが入園してから彼女に会って、それから彼女の本当の笑顔を見たことがない、そんな気がします。そのときにはもう夫婦仲もよくなかったらしいんですけど、心の休まる時がなかったのかもしれない。話相手でもいれば違ったんでしょうけど、私もまだ先生になりたてで全然気が回らなかったから……。今からでも遅くない、とは思うんですけど、今度は彼女に会えなくて……。あーもう、ほんとすみません、勝手に人生相談みたいになっちゃって」

ナオコが恐縮して頭を下げるのへ、やはり志保はゆるゆると首を振った。
自分でも不思議なことに真剣に聞いていた。研究所で暮らす志保は、姉を除いて人らしい人と会話することもない。皆人を見下し、相手を陥れることに腐心している人ばかり。だから相手のことを真剣に心配しているナオコの言葉は心地良く心に響いてくる。組織の中では味わうことのない穏やかな時間に触れた気がした。
ふと視線を感じて志保は戸口に視線を向けた。園長先生らしき眼鏡をかけた温厚そうな人物に手を引かれた少女がじっと顔を向けていた。
「ごめんなさいね、すっかりお待たせしてしまって」
柔らかな笑みを浮かべながら入ってきた人物に声をかけられてようやくナオコも気付き、ほっとしたように少女を見た。それからあっと声を上げると二人の横を通り抜け、戸口から顔を出すときょろきょろと辺りを見回した。
「ナオコ先生、どうなさったの？」
「さっきたっくんと約束したんです、あーちゃんが来たら呼んであげるから向こうで待っててって。でもあの子のことだから大人しく待ってないと思って。園長先生、たっくん見ませんでした？」
「いいえ、見てないわ。……でも、そう。タクヤ君が心配してたんだって。良かったわね？」
そっと少女に笑いかけると、少女は難しい顔をした。ぼそりと何か呟くが、それは志保だけでなく傍にいた二人の先生にも聞き取れなかったらしい。しかし言う気がないのか尋ねても何も言わず、つないでいた手を離すと志保の方へ歩いてきた。少し驚いたものの黙ってみていると、少女は必死に何かを考えるように眉を寄せると、ぎゅっと制服を握り締めた。尚も見ていると、やがてゆっくりと顔を上げ何かを訴えるように志保を見上げた。
志保ははっと息を呑んだ。この寂しげな表情を見たことがある。何年も前に、鏡の前で。

誰も心を許せる人がおらず、弱さを見せることは命取りになると幼心にも感じ取って虚勢を張っていた、いや張らざるを得なかったあの頃。感情を押し込め、心を殺し、冷酷にならなければ生きていけなかった。本当は誰かに甘えたくて、わがままを言いたくて、無邪気に笑っていたかった。しかしそんなことは許されない。

今はそのことに慣れてしまったけれど、それでも姉に会ったあとで組織に戻ると必ず妙な気分に襲われる。何か、人として大事なものを忘れてしまったような、そんな焦燥感を。

ふいに志保は感情があふれて目の前の少女を抱きしめた。たとえ全く違う理由だとしても、こんな目をしている少女を放ってはおけない。……もしかすると、これ以上過去の自分を見ていたくないだけだったのかもしれないが。

少女は驚いたように体をこわばらせたが、志保が抱きしめたままでいると徐々に力を抜いていき、やがて震え出した。そしてぎゅっと目をつぶると、驚くナオコ達の前で大声で泣き出した。初めて会ったときに泣いたのとは桁違いの大声に、あのときは我慢しながら泣いたのかと、志保はただ黙って抱きしめる力を強めた。

子供は敏感。確かにそうだ。多分この子にはわかったのだろう、自分と同じ寂しさを抱えていることが。だから私を選んだ。言葉にできない悲鳴をあげて……。

今まで我慢していた分を全て吐き出すようにしてしばらくの間泣き続けた少女は、少しずつ気が納まってきたのか、だんだんと嗚咽まじりの泣き声に変わり、やがて完全に泣き止んだ。

ゆっくりと志保が体を離すと、少女は真っ赤に泣き腫らした目で志保を見上げ、ぎこちないながらも照れくさそうに笑う。志保は安堵の息を漏らすと、ひざをついたままそっと手を差し出す。嬉し泣きの顔をしているナオコにふっと視線を向けた後、何のことか分からずきょとんとしている少女に笑いかけた。

「……私の名前は宮野志保よ。あなたの名前は？」

少女は大きい目をさらに大きくすると、あっ、と背後で声を上げ

るナオコを気にも留めず、本来は活発な子だという片鱗を覗かせて嬉しそうに笑った。そして手を握り返す。
「わたし、マツヤマ　アケミ。よろしくね、おねーさん」
「え……」
驚きに目を見張る志保の耳に、ぽつんとナオコの呟きが聞こえた。
「……私、彼女の名前を聞くのも忘れてたみたい……」

「本当に、なんとお礼を申し上げていいか……ありがとうございました」
「ありがとうございました」
「いいえ……」
深々と頭を下げるナオコ達の横には、まだ少し顔がこわばっているものの、すっきりとした表情をしているアケミと、嬉しそうにアケミを見ているタクヤの姿があった。
あのあとアケミの泣き声を聞きつけて起きだした園児たちの中にタクヤの姿もあり――どうやら彼は珍しくも言いつけを守っていたらしい――、志保につっかかっていったのだが、アケミの笑顔を見て急に態度を変えると、実に嬉しそうに志保に笑いかけたものだ。
園の中で一番の仲良しという二人はお互い見詰め合ってふふふ、と笑うと、そろって志保を見上げた。
「おねーさん、またくる？」
「きたかったらきてもいいぜ」
「こらっ、なんて口の聞き方するの！」
「せんせぇってさ、おこったらおにみてぇ」
「たっくん！」
きゃはは、と子供特有の甲高い声で笑うと、さっとタクヤは志保の背後に隠れ、べーっと舌を出した。悔しそうに口を尖らせるナオ

コの横で園長先生も笑みをこぼし、志保と目が合うとぱちん、とウインクをする。志保は思わず苦笑した。これではどちらが子供かわからない。どうも自分が思っていた年齢よりも年上らしいがこれでは間違うのも無理はない。

「も、もう、みっともないとこばかり見せちゃって……」

志保が笑っているのに気付いたナオコが顔を赤らめ、軽くタクヤを睨みつけた。タクヤはそ知らぬ顔でアケミの隣に戻っていくと、志保に向かって得意そうに笑う。志保はくすりと笑うとアケミに視線を移した。

「……縁があったら、ね……」

自分でもどこまで信じているかわからない、でも少しくらい願いを持ってもいい。志保の答えにアケミは嬉しそうに笑うと、元気に頷いた。

「それじゃ……」

「お気をつけて」

「志保さん、いつでも来てくださいね～！」

「おねーさん、さよなら！」

「ばいばーい」

手を振る二人に面映い気持ちで手を振り返すと、志保は後ろを振り返らずに歩いていく。重かった気分が今はこんなにも晴れやかだ。

次はいつ会えるだろう。さっき別れたばかりなのに、今すぐ会ってこのことを話したい。

志保は、いつ変わったのか、まるで今の心を映しているような澄み切った青空を見上げた。

春はまだ、遠い――――

「哀君？どうしたんじゃ」
立ち止まった哀に両手に荷物を抱えた博士が不思議そうに声をかける。
「……なんでもないの。今、いくわ」
そう返事をして前を向くと、それならいいが、と、博士は哀が隣に来るのを待って、歩き出した。
「もう買い忘れはないかの？懐中電灯の電池も買ったし、予備のロウソクも買った、あと忘れているものは……」
「博士」
ぶつぶつと呟く博士を哀は苦笑しながら止めた。博士はきょとんと哀を見下ろすと、何か思いついたのかと目を輝かせた。
「やはり忘れておったか。早く気付いて良かったわい」
「いえ、もう充分だと思うわ。それよりも天気は大丈夫なの？予報では明日は雨よ」
「なに、心配はいらん！」
博士はどんと胸を叩き、得意げな顔で哀に笑いかけた。
「ワシには秘策があるんじゃ。その名も……」
「てるてるぼうずにお願いする、なんて言わないでよ？」
「……な、なんでわかったんじゃ！？……い、いや、しかしただのてるてるぼうずじゃないぞ！」
哀の呆れた表情に慌てて首を振ると、博士は秘密を打ち明けるように神妙な顔をした。
「これはある知り合いに借りた、由緒正しいてるてるぼうずでな、これを吊るせば必ず晴れになるという霊験あらたかな……」
「はいはい」

「あ、これ、バカにしておるな、しかし本当に……」
「別にバカにしてるわけじゃないわ。それより博士、早く帰って明日の準備しましょ。今日は　早く寝ないと、朝早いんだから」
「しかし、本当に晴れになる……」
「わかったから、行きましょ」
足を速めた哀に博士も慌てて追いつくと、まだ不満そうな顔で隣を歩く。哀はくすりと笑みをこぼしてから、何気なく後ろを振り返った。
あの親子はもう見えない。
「晴れるんじゃぞ？百発百中で。なのに」
まだ言ってる。
哀はふふ、と笑うと、空を見上げた。
「……そうね、今日みたいに晴れるといいわね」
きょとんと見下ろす博士の後ろを飛行機雲が走っていった。

（後書き）

あとがき～

実はこれ、例の王子様シリーズのシェリーさん番として書き出したものなんですが、

なんだかよくわからない話に…（汗）

一応「ナオコ先生」はほんのちょびっとある人をモデルさんにしました。

でも、髪型しか似てないかな？

作中、「ろくでもない母親～」で「～茶髪～」と出てきますが、決して＝ではありませんし、そう思っているわけではありませんので、念のため。

では、最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

題名の「佐保姫」。これは「春の女神」のことです。さて、では「あけ」は…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0183a/

あけの佐保姫

2010年10月8日15時58分発行